

会 話 4

小野 正樹

Conversation 4

ONO Masaki

1. クラスの概要

週1コマで10週にわたって行う技能別クラスである。登録者数は毎学期20人を越え、学生も大学院生、研究生、短期学部留学生といった様々なステータスの留学生が参加し、国籍も様々であった。教材は自主作成したもので、その中にあるモデル文を参考に、クラス参加者は自分の話したい内容をクラス内で話した。毎回クラス内で他の人に質問した内容を質問シートに書くことと、数回カセットテープに学習者自身の会話を録音したものと文字データの提出を課した。そして、学期末にはテストを行った。

2. クラスの目標

トピックシラバスで、説明力と質問力を上げることを狙った。クラスには、学内で募集した日本語ボランティアのスタッフに入ってもらい、日本人学生とのスムーズなコミュニケーションコースが果たせることを期待した。内容としては、「自分を説明する」、「ものを説明する」、「写真を説明する」、「予定を説明する」、「分類して説明する」、「好きな本を説明する」、「気になるニュースを説明する」という説明力をつけさせる内容を課した。コースの後半では、教授者で用意した記事を基に、日本人ボランティアへの情報要求や学習者どうしの情報・意見要求といった質問力をつけることを狙った。

3. 授業の進め方

クラス前に、トピックとモデル文を参加者に渡し、クラス内で話したいアウトラインと語彙の収集をするように指示した。クラスでは3, 4人のグループに分かれ、そこにボランティアが加わる形で、一人ずつ説明を始め、説明した後に、ボランティアが中心となって、その発話内容についての質問を開始する。担当教官は、スムーズに行っていないグループには、刺激を与えたり、フォローしながら回った。1つのサイクルが終わる頃を見計らい、学習者にグループの移動を指示し、再び新しいグループで会話を始める。トピック内容とグループの人数にもよるが、コース前半では2回、後半は1回のグループ変更を指示した。比較的巧

く話している学習者には、クラスの前で話をするように伝え、残り時間15分の時点で、毎回2人程度が教室の前で説明を行い、他の学習者と質疑応答を行った。クラス終了後に、週末までに当日話した内容をテープに録音し、書き出したものと併せて、提出させた。さらに、クラス内で行った質問や、質問しなかった内容を質問シートに書かせ、提出させた。教師はそれらを添削し、テープには教師の発音を録音し、翌週に返却した。

4. タスク内容

4-1 説明力

説明力は、聞き手の理解に合わせて、効率よく説明することができる能力である。コース開始時は可視的なものの説明を行い、コースが進むにつれて、不可視的な情報内容に移行した。可視的なものとして、現物指示が可能な「物」「写真」を取り上げた。「物」については、外見と機能の記述、そして、入手した経緯を述べさせた。学生が取り上げた物として、文房具、おもちゃ、日本で買ったおみやげ、自国の名産など様々な物があった。「写真」は、写真を撮った背景説明、写真の構図、写真を見た現在の気持ちを説明させた。自国での写真、家族の写真、日本での旅行や研究室の写真、ホームステイした際の写真などがあった。可視的な物と不可視的なものの中のタスクに「好きな本」を説明することを課した。「好きな本」では、内容となぜその本が好きなのかという理由、その本を読んだきっかけ等を説明させた。世界的な名作、日本語の教科書や参考書、日本の文化紹介図書が挙げられていた。そして、不可視的な情報内容として、「予定」、「分類」、「気になるニュース」を説明させた。「予定」は自分自身のことであり、話しやすい内容だが、決まっている予定と、希望を述べさせた。「分類」はあるカテゴリーを取り上げ、分けて説明するものである。学生が挙げた例としては、「留学生センターの先生」、「ゴミ」、「食事の仕方」、専門の分類を述べる学生もいた。そして、「気になるニュース」は時事的なものであり、今年度は中国人学習者はロケット打ち上げのニュースを取り上げる人が多かったが、キーワードを初めに挙げさせて、聞き手の理解を助けるように指示した。

4-2 質問力

質問力の前提にあるものは、聴解力である。そこで、聞き直しなどの相手の発話の確認から始めた。前節で紹介したクラス参加者の説明に対して、質問することを毎回のクラスで課した。コース後半では、こちらがトピックを用意し、それについて日本人ボランティアがどのように思っているかを質問させた。トピック内容は、「国立国語研究所が外来語を日本語に言い換えることを提案」、「大学生の大学に対する満足度」、「人気就職ランキング」である。これらのトピックの記事を前週に配布し、クラス内では質問をして、情報取りを行わせた。質問の方法や、より細かく質問する方法、個人的な意見の聞き方を練習した。

5. 特徴

5-1 キャンパス日本語とアカデミック日本語

キャンパス日本語と、アカデミック日本語の両方をクラス活動に課した。4-1 で紹介した説明トピックのうち、自分自身の行為や所有物に関わる内容について話すことはキャンパス日本語の範疇であるが、他の人の意見を聞いて発表することなどは、アカデミック日本語に入り、コースの全般ではキャンパス日本語が中心であったが、後半ではアカデミック日本語の比重を増やした。

5-2 スピーチレベル

カジュアルとフォーマルの日本語の違いを意識させた。ボランティアとも授業回数が進むにつれて、コミュニケーションが進み、お互いの名前を覚え始めると、次第にスピーチレベルがカジュアルになっていった。そして、内容によっては、教師に話す日本語とは違うレベルで話しているグループも見られた。一方で、クラスの前で話す場合にはフォーマルな発表スタイルを求めた。また、質問者にもフォーマルなスピーチスタイルを求めた。

6. 今後の課題

会話能力の測定については、正確性と流暢性を両極として判断されてきたが、今回学生に課した説明力と質問力を会話能力全体の中での位置づけを行う必要がある。説明力においては、作文能力との比較、質問力は談話構成能力や文法能力と比較を行って行きたい。

また、ボランティアの定期的かつ一定量の確保を考える必要がある。現在は学内の研究科や事務室の掲示板に案内を出し、希望者は留学生センター日本語教育部門のWEB ページから登録ができるが、このボランティア制度を周知させることや、男子学生ボランティアを増やす工夫を行いたい。今年度は『筑波大学新聞第 230 号』でもボランティアについて紹介されている。

参考文献

小野正樹 (2002) 「会話のテクニック「もう一度言ってください」のコミュニケーション」、『月刊日本語』、アルク、pp. 82-85

筑波大学新聞編集委員会 (2003) 『筑波大学新聞』第 230 号、6 月 16 日発行、p. 3